
少年戯曲

源雪風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年戯曲

【コード】

N9724N

【作者名】

源雪風

【あらすじ】

セリフだらけのエセ大正浪漫小説。

(前書き)

過去に書いた同名タイトルの小説を、読みやすく一つにまとめました。

A「何とまあ井戸水は美味しいことだろう。」

ごくごくと音を立てて飲むA。

B「お前が飲んでいるのは、井戸の水なんかじゃあ無い。」

A「どうしてお前はそう人を食ったようなことばかり言うのだね？」

B「それはいいから、吾輩に『これは井戸水であろう』と言い給え。」

A「ついに気が違ってしもうたか。これは井戸水であろう。」

B「一言多かつたが、答えてしんぜよう。それは、乙女の涙である。」

A「気を確かに持て、友よ。お前は理屈っぽい皮肉屋であつたろう。いつから浪漫チストになつたのだ。」

B「乙女の涙が乾き、天に昇り、雨となり地に降り注ぎ、井戸に溜まり、今お前の口まで届いたのだよ。」

A「それなら乙女の涙じゃなくても良からう。」

B「じゃあ、美味しい水を飲んでる最中に、『それは犬の小便だ』
と言えというのか。そんな非人間的なことが吾輩にできると思つたか。」

A「現に、今、言つてしまつたじゃあないか。」（苦笑）

B「これはしまった。どうか先ほど言つたことは忘れておくれ。」

A「ハハハ。ズーッと覚えていてやろう。未来永劫、この身が消えてなくなるまで。」

B「相変わらず人の上げ足ばかり取つて。それだからお前には、吾輩のようなひねくれた友人しかできぬのだぞ。」

A「まあともかく、ひねくれ者同士仲良くやっつてゆこう。」

B「ああ。それが良い。」

変わりゆく 世界の水を 飲むくせに お前も俺も 昔と変わらず

何の因果か、AとBは路面電車に乗り、学用品を買いに行くことになった。

B「またお前と外出か。吾輩、そろそろ飽き飽きしてきたぞ。窓の外を見て、不満げなB。」

A「じゃあ聞こう。俺以外でお前の買い物に付き合うような、気の良い知り合いはいるのか。」

B「おらん。」

A「ならば仕方あるまい。それが、一人で行くのだな。」

B「独り……。まさかそんなとんでもない。今から街へ行くのだぞ。可憐でか弱い吾輩が悪漢に狙われたらどうするのだ。」

A「俺には悪漢を退治し、へこへこするだけの力は持ちわせていないぞ。どうするつもりだ。」

B「もちろん、お前を身代わりにして、妹の結婚式に出る。」

A「走れメロスだな。それは断る。」

B「どうして。吾輩たちは幼い時分から友人であったであろう。」

A「お前には妹はいないし、いたとしても、結婚できる年齢ではない。そのまま逃げる心づもりであろう。」

B「警察を呼んでくる。」

A「その間、俺はどうしているというんだ。」

B「お前の体は丈夫だから、べこべこに殴られて吾輩を待っている。」

┌

A「酷い。あんまりだ。お前は俺を友だとは思っておらんだろう。」

B「友だからこそ、その大役を任せるのだ。」

A「・・・今度から独りで外出し給え。」

B「冗談が過ぎた。吾輩が悪かった。」

A「人が聞いて不愉快になることは、冗談とは言わぬ。」

B「お詫びにアイスクリンをおごるから、どうかどうか許してくれ。」

┌

A「アイスクリン!?・・・いや、食べ物で誤魔化したって無駄だ。」

俺はもう食い物につられる年じゃあ無いからな。」

B「では、どうしたら許してくれる。」

A「もう二度と『お前と外出なんて嫌だ。』なんて言うんじゃない。」

B「何だ。そんなことなら簡単だ。嘘だったのだからな。本当は独りでなくて良かったと言いたかったのだが、素直になれなかったのだ。」

A「馬鹿言うんじゃない。嘘もほどほどにしろ。」（笑）

学用品を買った帰り道、月が綺麗だったので、寄り道をして、スキの生い茂る野で、月見と洒落込むことにした。

A「ああ、疲れた。長旅だったな。」

B「月は毎日夜空に浮かんでいるが、嫌だとか、休みが欲しいとか、思わないのだろうか。」

A「月には心が無いから、そうは思わないだろう。」

B「どうして月に会ったことが無いのに、心が無いと言い切れるのだ。」

A「だって、月は岩石の塊だろう。そんなものに心がある訳が無いだろう。」

B「どうして月が岩石だと分かる。」

A「先生が仰っていたからさ。君も聞いただろう。」

B「先生は絶対に正しいと言い切れるのか。」

A「先生は正しいことを教える職業だから、嘘は言わないだろう。」

B「じゃあ、吾輩が先生になったら、お前は吾輩の言うことを全て信じるのだな。」

A「・・・信じない。」

B「よって月にも心があるかもしれぬ。分かったか。」

A「分かった。」

しばらく無言で月を見る二人。

B「吾輩の思うに、月は地球に恋をしているのだ。」

A「ほう。そりやまたどうして。」

B「地球の周りをせわしなく、くるくる回っている。しかし、地球との距離が縮まらないからな。叶わぬ恋みたいじゃないか。」

A「・・・お前が最近浪漫チストになった理由が分かったぞ。」

B「言ってみろ。」

A「お前は恋をしているのだろう。」

B「さあ、どうだろうな。」

またしばらく無言。

A「地球と月の距離が縮まって、恋が叶ったら、月が地球にぶつかって、危ないじゃないか。月には悪いが、恋が叶わないでほしいな。」

休日で暇だったため、BはAの家を訪ねて、Aの部屋に招かれた。

B「何だね。このぼろ雑巾のような猫は。」

ぼろ猫、Bにまとわりつく。

A「ああ、そいつか。俺の部屋に住みついている獣だよ。」

B「こいつはお前のぺつとなのか。」

ぼろ猫、Bの頬を舐める。

A「勝手に住みついているのだから、ぺつとじゃない。」

B「じゃあ野良か。」

A「俺の家にいるのだから、野良でもない。」

B「ぺつとでもなく野良でもない。まことに不思議なヤツよ。良く見ると、月みたいな綺麗な黄色い目をしている。」

A「うむ本当だ。こいつはぼろ雑巾ではなく、月の仔かもしれない。」

な。」

B「月の仔で思い出したのだが、吾輩たちは星のかけらなのだよ。」

A「また始まった。」

B「嫌なら言わんぞ。」

A「いや、聞きたい。」

B「吾輩たちは地球で生まれたから、地球でできていると言える。

地球は星が集まってできているから、吾輩たちは星のかけらなのだよ。」

A「どうして星ではなく、星のかけらなのだ。」

B「星が、ぶつかり合っかけてらになつたものが合わさって地球になつたからな。それにしてもこの猫、大胆不敵というか、人懐っこいな。」

ぼろ猫、Bの膝の上で眠る。

A「お前は魚屋の息子だから、魚の匂いでもするのだろう。だから猫に好かれるのだ。」

B「……!! 吾輩から魚の匂いがするか。」

自分を嗅ぐB。

A「ぶんぶん匂うわけではないが、普通の人よりは匂うんじゃないか。」

B「お前からは少し魚の匂いがすると、言いたいのか。」

A「人間の俺には、お前から魚の匂いは感じ取れないが、猫には分かるやもしれん。」

B「それなら良かった。お前に魚臭い男だと思われていたら嫌だからな。」

ぼろ猫、いびきを立てて寝る。

A「その猫が、俺以外の奴と寝ている所なんて、初めて見た。」

B「よそで、色んな奴と寝ているかもしれんよ。こいつ、手慣れておるから。」

A「ぼろのくせに。」

B「ぼろだからだよ。きつと寂しいんだろう。」

ぼろ猫の背中を優しく撫でるB。

A「幸せそうだな、ぼろのくせに。」

B「ぼろは幸せになっちゃいけないのか。」

A「きつとお前の膝は温かかろう。ぼろを載せるにはもったいない。」

寝がえりをうつ、ぼろ猫。

B「今頃竜宮城で、魚をたらふく喰う夢でも見ていることだろう。吾輩の膝は気持ちいいからな。」

ぼろ猫を愛おしげに見つめるB。

窓から夕陽が差し込んできた。

B「おや、もう夕方か。随分長居してしまったな。今何時だ。」

A「六時。」

B「そろそろ帰らねば。おふくろと親父が心配する。じゃあな。」
ぼろ猫をヒョイと持ち、Aに渡すB。

A「じゃあな。気をつけて帰れよ。最近は河童が出るからな。」

B「ああ。」
走り去るB。

Bに渡されたぼろ猫を、そっと抱きしめるA。

Aは暇なので、ぼろ猫を抱いて、Bの家へ行った。

B「何だいきなり。おや、今度は月の仔も一緒か。」

ぼろ猫の頭をわしゃわしゃなでるB。

A「俺が家を出て歩いていたら、ずーっと着いてきてな。だから、今日は寒いし、カイロ代わりに抱いてきた。」

B「お前のことがよっぽど好きなんだな。・・・おつといけない。玄関で立ち話では、疲れるだろう。まあ上がって行け。」

A「おう。」

Bの部屋にて。

A「お前の部屋の窓からは、海が見えるんだな。海、行きたいな。」

B「まあ、ちよっぴり見える程度だが。」

海を見るAの背中を、しみじみ見つめるB。

B「そつだ、明日、吾輩と海に行くか。街に行く時、付き添ってくれた礼だ。」

A「どうして明日なんだ。急すぎやしないか。」

B「吾輩は明日、漁から帰ってくる親父に、弁当を届けにやならんのだよ。ついでにお前も一緒に行かないか。」

A「良かろう。で、何時頃にお前の家に行ったらいい？」

B「六時ごろに来てくれ。」

A「承知した。」

ぼろ猫、Aをじっと見つめる。

A「ん？お前も行くか。」

ぼろ「にゅー。」

B「本当に可愛いやつだ。よしよし。」

ぼろを撫でるB。

A「お前とぼろは、似ているな。」

B「吾輩とお前も似ているから、お前とぼろも似ている。」

A「似た者軍団というわけか。」

B「しけた軍団だな。ちつとも華が無い。」（笑）

A「違いない。」（笑）

B、もじもじしながら、

B「二人乗りしてきた。」

父「そうかそうか。帰りは父ちゃんの車の自転車に乗ってきたな。自転車も車の荷台に乗つけてな。」

海へ行くため、AとBは出発した。

B「お前、自転車は無いのかね。海は遠いぞ。」

Bは、自転車に乗って言う。

A「俺は走るから良い。でも、ぼろはお前の自転車かごに入れさせてもらおう。」

B「分かった。途中でへばっても吾輩は知らんからな。」
むすつとするA。

A「大丈夫だ。」

出発し、しばらく走る二人。

B「言わんこつちやない。もう息が上がってるじゃないか。」
からかうように言うB。

A「ま、まだ、だ、大丈夫だ。はあはあ。」

B「ほら、次は上り坂だぞ。本当に大丈夫か。」

A「はあはあ、へーきだあつ。」
何とか坂を登りきるA。
振りかえるB。

B「お前。下駄がすれて血が出てるじゃないか。」

A「大丈夫だつて、言ってるだろっ！」
よろよろのA。

B「ちよつと休むか。」

A「いいから行こう。俺は大丈夫だ。」

B「大丈夫つて言う者は、大抵大丈夫ではないものだ。吾輩も疲れたから休もう。」

A「俺は疲れてなんかない。」

B「吾輩が休みたいから休もう。な？」

A「それなら仕方ない。」

坂の上の大きな木の下で休む二人。

Bは、Aの足を見た。

B「ああっ、何て痛々しい。」

A「これぐらい大したこと無い。」
そっぽを向くA。

B「お前は自転車に乗りたまえ。次は吾輩が走る。」

A「分かった。」

しばらく休んだのち。

A「では、お前の自転車を借りるぞ。」

B「そうしろ。」

しばらく走るAとB。

ブチッ！

A「何の音だ。」

B「下駄の鼻緒が切れた。」

A「じゃあ、自転車交代だ。」

B「お前だつて足を怪我してるだろう。こんなもの結べば大丈夫だ。」
「

しかし、鼻緒が派手に切れたため、結べなかった。

A「それなら仕方がない。二人乗りだ。俺の後ろに乗れ。」

B「な、何を言っているんだ。」

A「今は非常事態なのだから、仕方がない。」

B「吾輩は歩いて行くから、お前は自転車で家へ帰れ。」

A「せっかく二人で海に行くのを楽しみにしていたのに、こんな所で引き返せるか！乗れ！」

B「お前は言いだしたら聞かぬからな。分かった。」

Aの後ろに乗るB。

しばらく走る。

B「吾輩、良いことを思いついたぞ。」

A「なんだ。」

B「吾輩と、お前の下駄を交換して、吾輩が自転車を漕ごう。それならお前の足は傷つかずに済む。であるから交代しよう。」

A「仕方がないなあ。そうするか。」

AとB、交代。

B「お前、重いな。」

A「俺が重いんじゃない。ぼろが重いんだ。」

B「ぼろなんて、片手でヒョイだ。お前が重い。」

A「悪かったな。重くて。」

Bの背中をちよつとつねるA。

B「あ痛たた…。おい！事故になったらどうするんだ！」

A「悪い悪い。ははは。」

B「おい、これからは下り坂だぞ。しっかり掴まってい給えよ。」

A「掴まるって、どこに？」

B「ほら、今から下るぞ！いいから掴まり給え！」

A「おい、一回止まれ！うわああああ！」

B「さすがの吾輩も位置えねるぎいには勝てん。うわっ！そんなにぐわつと掴むことはなかるうに！」

A「うるさい！生きるか死ぬかの大ばくちなんだぞ！」

B「ぐえっ。朝食べたものが、口からでる！もっとゆるくしがみつ
け！」

A「ざまあみる！止まらないからだぞ。全部戻しちまえ。はっはっ
は！」

B「ぐえっ。」

A「うわっ、本当に吐いたのか。」（心配顔）

B「嘘だ。はあ。やっと坂が終わった。」

A「ぼろは大丈夫か。」

B「こいつ、寝てやがる。」

A「図太い奴め。」

しばらく疾走。

A「おや、海の匂いがしてきたぞ。」

B「もうしばらくしたら海が見える。」

A「じゃあもつともつと早くこげ。俺は早く海が見たい。」

B「今の速度が全力だ。」

A「いいからもつと。」

B「お前は吾輩を殺したいのか。」

A「もつともつと。」（絶叫）

B「うるさいな。吾輩のすぐ後ろで叫ぶんじゃない。振り落としてやろうか。」

A「お前にそんなことができる筈がない。」

B「どうして。」（挑発的に）

A「俺がお前にしがみついて、道連れにするから。」

B「へっ。ほら、海だぞ。見給え。目に焼き付け給え。」

朝日に輝く蒼い海。

A「わー！海だ海だ海だあーっ！！」

B「こら。吾輩の後ろで狂喜乱舞するんじゃない！自転車が倒れるだろうが。」

A「大丈夫。お前ならできる。安全運転！」（輝く笑顔で）

B「嬉しいか。連れてきて良かったなあ。」

A「おや、船が見えるぞ。お前の親父が乗ってるんじゃないか。」

B「あの大漁旗の色は、親父の船ではないか！」

A「立派な船だな。遠くからでも星のように、白く輝いている。」

B「当つたり前だ。吾輩の親父の船なのだから。」

A「月の仔に、星の船、か……。」

港に到着。

A「いやー。広い港だな。で、お前の親父はどこにいる。」

B「向こうの船着き場であろう。行くぞ。」

早足ですたすた向かうB。

A「おい、弁当忘れてんぞ。」

弁当を持って、後を追うA。

B「こりゃ、しまった。」（笑）

船着き場にて。

A「あつ、いたいた！親父！！。」

手を振りながら親父に駆け寄るB。

父「わざわざ弁当、持ってきてくれたんか。ようやった！」

Bの頭をわしやわしやなでる親父。

B「てへへ。はい、お弁当。」

親父に弁当を渡すB。

父「で、そつちの坊ちゃんは？」

B「僕の友達。」

A「こんにちは。」

はにかむA。

父「うちの息子に、こんなボンボンの友達ができたんか。うちの息子はへそ曲がりだけでも、まあ仲良くしてやってくんか。」

A「はい。こちらこそお世話になってます。」

綺麗なお辞儀をするA。

親父、Bを見て、

父「家からここまで距離あったろ。どうやって来たんだ。」

B「自転車を必死になって漕いできたのさ。」
父「お友達も自転車か。」

「にやあーん。」
遠くから猫の鳴き声がする。

A「しまった！ぼろを置いてきちゃった。あいつ、大丈夫かな。」
B「親父、ちよつと自転車見てくる。」

自転車を置いた場所に戻ってきた。

A「良かった。大丈夫だ。」
ぼろ猫を抱きかかえるA。

B「こいつ、意外と寂しがり屋なのだな。お前に良く似ておるわ。」

A「俺は寂しがり屋なのだろうか。」

B「吾輩の思うに、重度の寂しがり屋だな。」

A「お前だってそうじゃないか。」

B「まあな。」

親父の所へ戻ったAとB。

父「いきなりどうしたのかと思ったら、猫を迎えに戻ったのか。それにしてもその猫、味があるなあ。」

感心したように猫を見る親父。

B「僕の友達の、友達なんだ。」

A「そうか。じゃあ、友達だな。友達の友達は友達だから。そうだな・・・。ちよつと待ってる。」

親父、船に戻る。

A「俺たちの他にも、ぼろの良さが分かる人がいたなんて・・・。良い親父さんじゃないか。」

B「そうだろそうだろ。」
自慢げなB。

A「俺んち、父ちゃんはいないから、羨ましい。」
海の方を向いて、目を潤ませるA。

B「お前には吾輩がいるからじゃないか。」
A「・・・ありがとうよ。」

親父、戻ってくる。

父「この魚は、市場じゃ売れないから、友達の友達にやるよ。」
ぼろ猫に魚をやる親父。

B「おっ！夢中で食べてる。やっぱり新鮮なうまいんだな。」

A「こんななに餌に夢中のぼろは、初めて見た。おじさん、ありがとう
ございます。」

きれいにお辞儀するA。

父「いいってことよ。・・・俺もこいつを見てたら、腹減ってき
まった。俺が弁当を食ってる間、向こうの浜で遊んでろ。喰い終
ったら、呼びに行くから。」

B「うん、そうするよ。」

浜にて。

A「うわぁ、広い砂浜。広い海！」

喜びのあまり、走り出すA。

B「ハハハ。お前はアホウだなあ。たかが海じゃないか。」

A「だって海だぞ。大きいんだぞ！アホにならなくて、何になれ
て言っただ？」

はしゃぎ回るA。

B「まあ、元気なのは良いことだ。気が済むまでそうしてい給え。」
しゃがんで貝を拾うB。

A「おい。せつかくの海なんだから、走ろうぜ。」

B「海イコール走るといふ、その考え方が分からん。」
貝をポケットに入れるB。

A「俺には、せつかく海に来たのにじめじめと貝を拾う、お前の根性が分からんね。」

キラキラと笑つて言うA。

B「吾輩は、自転車を漕ぐのに疲れたのだ。少し休ませ給え。そういえばお前、足は大丈夫なのか。」

A「もう全然大丈夫。血と痛みは止まった。ちなみに、下駄はそこから辺に投げておいた。」

B「大丈夫なら良いが、無理はするなよ。」

A「さあ！もう十分休んだだろ。お前も走るぞ！青春だぞ！」

Bの腕を掴み、走り出すA。

B「やれやれ。やっぱり海に連れてくるんじゃ無かつたな。」（苦笑）

へとへとになるまで、走る二人。

B「もう、いいだろう。腕を離しておくれ。」

Bの腕を離して、Bの壊れた下駄を持つて走るA。

A「下駄を返して欲しけりや、俺に追い付いてみる！」

B「その必要はない。」

貝を拾うB。

A「どうして。」

B「お前がそのまま下駄を返さなければ、泥棒となり、しょっぴかれるからな。」

貝をポケットに入れるが、入りきらないので、押し込むB。

A「ちえつ。そこは騙されるよ。」

つまらなそうに砂を蹴るA。

B「生憎、吾輩は腹黒いんでな。下手な計略はすぐに見抜けるのだ。」

「貝でいっぱいポツケの入り口を手で押さえて、不敵に笑うB。」

B「そうだ。お前に良い物をやろう。」

A「俺を欺くつもりだろう。」

B「いいからこい。」

A「しぶしぶ近づく。」

A「何だ。」

B「手を出せ。」

A「嫌だ。」

B「なら、やらないぞ。」

A「へっ。」

手を出すA。

B「どうだ。綺麗な貝殻だろう。同じものを二つ見つけたから、
つお前に与えよう。」

A「きれいだ。本当にきれいだ。」

B「大切にし給えよ。」

A「言われなくとも、そうさせて貰う。」

そつと貝殻を、ポツケに入れるA。

父「おーい！帰るぞー！」

B「あ、親父。今行くよ。」

親父の方へ走るB。

A「お前と来れて良かったよ。」

Bを追いかけて走るA。

帰りは、Bの親父さんの車の荷台に乗せてもらう。

A、大の字に寝る。

A「ああ。楽しかった。きつとぼろも楽しかったろう。たらぶく食
べて眠って居やがる。」

Bの膝の上で眠るぼろ猫。

B「連れてくる前より随分と重くなったよ。こいつは。」

A「お前も寝ころべ。空が綺麗だ。」

寝ころぶB。

ぼろ猫は脇に置いた。

B「本当だ。雲の形の具合も、空の青さも、すごくいい。」

A「あそこの雲を、掴んで食べたら、美味かるうよ。」

B「止めとけ。雲は塵芥で、出来ているのだから、お腹を壊すぞ。」

A「いいじゃないか。本当に食べるわけじゃないのだから。そんな酷いことを言わなくても。お腹は壊れなかったが、夢は壊れたぞ。」

B「お前は、井戸水を飲んでいるときに、吾輩に言われたことを覚えてくれているか。」

A「井戸水は乙女の涙・・・だろ。」

B「それもそうだが、吾輩が言いたいのは、犬の小便の方だ。」

A「せっかく美しい空を見ているのに、そんな汚いことを思い出させるな。」

B「まあ聞いてくれ。雲は水が塵芥に付いたものだ。そして、水は犬の小便だったかもしれない。すると、雲というのは、犬の小便と塵芥が合わさったものであろう。」

A「それがどうした。」

B「犬の小便も、塵芥も、世の中に嫌われて、役に立たぬものであろう。しかし今、それらが美しい雲になっておる。吾輩の目を楽しませている。」

眩しそうに目を細めるB。

B「だから、役に立たぬように思えるものも、必ず大切な役割が与えられているのだ。」

A「俺みたいなボンクラにも、大切な役割があるのだろうか。」

B「吾輩にとって、お前は大切だ。」

A「俺も、お前のことが大切だ。」

二人を乗せて、車は走る。

A「さっきの雲の話だが、俺の考えたことも聞いておくれ。」

B「ほう。聞かせてくれ給え。」

A「雲の水の部分が乙女の涙で出来ていて、塵芥は出さずに終わった恋文を燃やした灰だとしよう。そうしたら、雲が白いのは乙女の純粹な心のせいだ。」

B「詩人だな。そういうの嫌いじゃない。」

車が、Bの家に到着。

A「オヤ、もう着いたようだ。さっすが車は早いほう。」

B「残念だな。もう少しお前と話をしていたかった。」

A「じゃあ、近くの段々原へ行つて、話そうじゃないか。」

B「厭だ。あそこは毛虫が出るからかぶれてしまう。」

A「今頃は毛虫も繭か蛾になつてゐる時分だろうから、大丈夫である。」

B「それならば行こう。しかしちょっと待ってくれ。」

A「俺も家に、ポシエットを取りに行きたい。じゃあ俺の家の前に十時に集合でどうだ。」

B「合点。」

Aの家の前で、落ち合う二人。

A「ちよいと待たせたな。」

B「また黒くて敵つい服を着て。さっきまで良家のボンボンだった癖に。」

A「ふうう。やはり、ぱんくふあっしょんは、いい！」

B「腰に装備している鎖は、何に使うのだね。ターザンの真似ごとでもする気か。」

A「ただの飾りさ。そういうお前こそ、服のそこかしこに白いレー

スがぴらぴらして目障りだ。いかげん少女趣味は、止したらどうだ。」

B「お前、由緒正しき、ごしっくろりーたを侮辱するのか。これはだな、つまらぬ社会に対しての戦闘服なのだぞ。」

A「父親の前では着物だつたくせに。」

B「お前だつて着物だつたらう。」

A「まあ、俺のぱんくも社会に対しての戦闘服のようなものだから、お前の気持ちは分かる。」

B「ほお。随分と物分かりが良くなったな。この前までは、俺もお前も、一歩も引かず、三時間程喧嘩したっけな。」

A「あつたなそんなこと。」（苦笑）

B「そういえば、ぼろはどこへ行った。」

A「ぐっすり眠っていたから、家に置いてきた。」

段々原へ、歩き出す。

A「段々原に行くのは久しぶりだな。」

B「吾輩が大量の毛虫に襲われてから、行っていないな。」

A「あの時は怖かった。辺り一面毛虫のじゅうたんだった。」

B「止める止める。気持ち悪い。思い出させるな。」

青くなるB。

B「毛虫を思い出すから、お前、そのちくちく頭を元に戻せ。」

A「俺と毛虫を一緒にするな。」

水たまりで自分を見るA。

A「・・・本当だ。俺は毛虫のようだ。まさに毛虫の化身だ。」

くすくす笑うA。

B「毛虫は自分の身を守る為に、毒々しい姿をしている。吾輩たちも、そうかもしれない。」

A「お前はともかくとして、俺は毒々しくなんてない。」

B「発言が毒々しいから、姿も毒々しく見える。」

A「へっ。うるさい。」

Y字路の分かれ道に、突き当たる。

A「どっちに行っても段々原へは着く。さあどっちが良い。」

B「右がいい。左の道だと河童が出るから厭だ。」

A「右だつて幽霊が出るらしいぞ。」

B「幽霊は話せば分かりあえそうだが、河童は馬鹿だから、右が良い。」

A「じゃあ左へ行こう。」

右へ進む。

A「森を抜けたら段々原はすぐそこだ。」

B「見る！赤くて大きなきのこが生えておる。あの大きさなら座れるかもしれない。」

A「止めとけ。座ったら変な汁が出てきそうだ。せっかくのびらびらが汚れたらいけない。」

B「違うない。」

A「あそこの茂みからは蛇でも出てきそうだ。」

B「よし。木の枝でつついてみよう。」

おもむろに枝を拾い、茂みをつつくB。

B「・・・何も出て来ん。」

A「きつと蛇は昼寝中だ。さあ行こう。」

B「ああ。」

三分程歩いて、段々原に着いた。

B「ふう。着いた。」

何かを探すA。

B「おいどうした。」

A「この前来た時に座った切り株は、どこだろうか。」

B「それなら確か向こうの方に。」

A「どらどら。．．．あつた！けど．．．。」

B「けど、どうした。」

Aが指を指した先には、赤くて大きなきのこだらけになった切り株があった。

B「うわ、さっきのきのこだらけだ。」

A「どうなってるんだ。森といい段々原といい、きのこよ、でしやばるな。」

B「毛虫の次は、きのこか。」

A「うわっ！」

尻もちをつくA。

変な煙に包まれるA。

A「げほげほ．．．。」

B「きのこの胞子を大量に吸ったな。気は確かか？」

A「ぺっぺっ、口に入った。」

B「ここはもう、吾輩たちの知っている段々原ではないな。」

Aの背中をさするB。

B「おい、大丈夫か。」

A「おう。水筒の水で口をすすいだから平気。」

原っぱへ行く二人。

B「良かった。ここは大丈夫そうではないか。」

A「でも、あれを見る。秘密基地じゃないか。」

B「どうやらそうらしい。行ってみよう。」

恐る恐る近寄る二人。

A「誰も居ないみたいだ。」

秘密基地の中に入るA。

B「吾輩たちの秘密の場所だったのに。」
秘密基地の中に入るB。

A「どこの街のヤツだろうか。この村の子供は、俺たちだけだから。」

ざわざわと外で声がする。

知らぬ子「おい、お前ら！俺たちの秘密基地で何やってるんだ。」

しらん子「何だ？こいつら変なかつこ。」

殴ろうとするA。

Aを羽交い絞めにするB。

B「止める。お前の綺麗な手が、鮮血で汚れたらいけない。」

しらん子「気持ち悪い奴らめ！とっとと出てけ！」
石を投げつけてくる知らぬ子。

秘密基地から走り去るAとB。

A「家宅侵入した俺たちも悪かったが、あいつら、酷いな。」
俯いているB。

鼻をすすする音がする。

A「……泣いているのか？」

B「悔しい。何にも言い返せなかつた吾輩が。」

A「何を言っている。お前は俺を止めてくれたじゃないか。ああしてくれなかったら、俺は殴っていた。だから、お前は立派だ。泣くことなんかない。」

B「変な格好とか、気持ち悪いと言われたのが悔しい。」

A「俺はそうは思わない。あんな奴らの言うことなんて、気にするな。」

B「そうか。まさしくその通りだ。お前がそう言ってくれれば、良

い。」

ハンカチを取り出すA。

A「さあ。泣いていないで遊ぼうじゃないか。」

ハンカチを受け取るB。

B「やつぱり、綺麗な手。」

A「へへへ。そうか？毎日欠かせず手洗いうがいをしているからな。」

B「いや、菌の有無ではなく、形の問題なのだよ。白く長く細い指、

桃色のつめ、掌に透けて見える青き血潮、どれをとっても美しい。」

A「手を褒められても、正直複雑な気持ちだ。どうせなら顔だちとかを褒められたい。」

B「顔など、化粧でいくらでも変えることができるからな。手には化粧はしまい。だから美しいのだよ。」

A「お前、手ふえちだったのか。今度から手袋をしよう。」

B「そんな！勿体無い。」

A「お前は、俺と友人なのではなく、俺の手と友人なのだな。」

B「違い。お前とも友人だ。」

A「ならばよし。」

B「それで、手袋はするのか。」

A「エレキギターが引きにくいから、しない。」

B「良かった。」

きのこに囲まれてはいるものの、ほのぼのする二人。

A「で、いつまでもここにいても、きのこになりそうだから、どこか別の所で遊ぼう。」

B「音無川はどうか。吾輩は変な汗を沢山かいた。幸い今日は温かいし、汗を川で流したい。あそこなら浅いから、河童は出ないだろう。」

A「大賛成だ。」

歩き出す二人。

B「今日はきのこ地獄に出会ったり、見知らぬ童に罵られたり、吾輩は、気がめいっただよ。」

A「全くだ。川遊びくらい十分に楽しみたいものだな。」

B「オヤオヤ。もう川が見えてきたではないか。」

A「すぐ近くだからな。でも待て、誰か先客がいるぞ。」

B「さっきの恐怖軍団の片割れだろうか。」

A「いやそれにしては幼い。5歳くらいじゃないか。むむ、迷彩柄の着物を着ている。」

B「吾輩にも見える。おや、あやつ、髪の毛が緑色ではないか。しかも頭に茶碗を載せているではないか。摩訶不思議な者だ。」

A「くちばしはないが、河童じゃないか。ほら、ヤツの手を見よ。水かきがついとる。」

B「河に童と書いて、河童だからな。どうする？」

A「まあ子供河童のようだし、離れて遊んでいれば大丈夫だろう。」

B「それにしてもヤツは、悲しそうだな。」

A「そんなことな良いから、遊ぼう。」

B「おう。」

河童から離れた所へ来た二人。

A「荷物と服は、あそこの柳の下に置いておこう。」
ふんどし一丁になって、はしゃぐ二人。

B「ふふ。河の水は冷たくて、気持ちがいいな。」

A「そうか。じゃあ河の水をぶれぜんのだ。」

Bに水を浴びせるA。

B「お前にも。それ！」

Aに水を浴びせるB。

A「ぷはあ。やったな！それぞれ！」

Bに水を浴びせるA。

河童「うるさいゾ君たち。河に引きずり込んで、黙らせちゃうよ。」

A・B「出た！」

河童「友達の居ない、僕に対しての嫌がらせですかあ。楽しそうに二人できやはきはしちやってさ……。」

A「一緒にやるか。」

河童「へっ。やだもん。僕はね、しりこだまをもらいに来たの。大人しくしてくれば許したげるから、後ろ向いて。」

B「前から疑問に思っていたんだが、しりこだまとは一体何なのだ。そして、どうやって取るのだ。」

河童「しりこだまってのは、人間風にいえば、希望かな。君たちの場合、互いを思いやる心を失うね。そんなもってどうやって取るかというと、お尻の穴に手をつ込んで、ぐいっつとやるわけさ。そーすると、魂の塊みたいのが取れんのさ。」

A「うわあ、痴漢め。」

B「うるさあーい！死んだ父ちゃんを生き返らすには、しりこだまが七個必要なんだよう。」

A「玉が七個……どこかで聞いたな。」

河童「と・に・か・く。お前ら二人から取れば、ちょうど七個なのだから、ちよつとガマンしてよ。」

A「断る！」

河童「父ちゃんが生き返つたら、きつと意地悪な新しい父ちゃんをやっつけてくれるんだ。」

B「河童にも家庭の事情があるのだな。」

河童「さあさあ、くれよう、しりこだま。命は助けてあげるからね？」

おもむろに柳の下のポシェットから、何かを取り出すA。

A「こんなこともあるうかと、じゃーん！キュウリ！これを与えるから許してくれ。」

河童「そ、それは！くそう。ずるいよ。」

A「ほらほら。要らないのなら、食べてしまつぞ。」

B「さすが吾輩の弟子。やるときはやるな。」

A「弟子ではない。さて、どうする河童よ。」

河童「簡単なことさ。僕がお前らなんか、へこんだ鍋みたいにボロボロにしちゃうもんね。」

A・Bに飛びかかる河童。

ひらりとかわすA・B。

転ぶ河童。

河童「に、人間がいぢめる。うえーん。新しい父ちゃんも、母ちゃんも、人間も大っ嫌いだあ。」

A「しりこだまを取らないのなら、キュウリを与えよう。だから、泣かないでくれ。」

河童「ぐすんぐすん。本当は僕、しりこだまなんて、どーでもいいんだよう。集めたつてお父ちゃんは生き返らないんだよう。僕は、僕は友達が欲しいだけなんだよう。」

キュウリを受け取り、食べる河童。

B「では、新しい父ちゃんのくだりも、嘘か。」

河童「そこは本当。」

A「仲間に入れて欲しいなら、素直に言えばいい。」

河童「でも、この前、河で遊んでた子たちに、そう言ったら、『河童なんていれてやんねーよ。バーカ。』って言われて、いぢめられたんだもの。」

B「そうか。かわいそうにね。」

河童「分かってくれるの……。」

A「さあ。三人で遊ぼう。」

河童「いいの？」

B「勿論。」

A「三人の方が楽しいからな。」

三人で日が暮れるまで、遊んだ。

Bは家にて、飛行機の写真を見ていた。

河童「おーい。遊びに来たよ。」

B「おや、声がするな。どれどれ。」

窓から外を見るB。

B「声はするが、姿は見えず。どれ、外に行ってみるか。」

外に出て辺りを見回すB。

B「おーい。どこだね。」

河童「ここだよ。」

井戸からびよこつと出てくる河童。

B「うわぁ。どうしてそんな所から出てくるんだね。」

河童「この井戸は、僕の住んでる河につながってるの。地上を歩くと干からびちゃって良くないから、ここは便利なんだ。まあ、雨の日なら大丈夫なんだけどもね。」

B「水道があるから、井戸なんてすっかり忘れていた。」

河童「びっくり、した？」

B「ああ。びっくりびっくりの大びっくりである。」

河童「そっか。へへへ。」

B「そういえば、吾輩の庭の畑で、キュウリが取れたのだよ。待っている。持ってきてしんぜよう。」

河童「いいの？ありがとね。」

畑に行くB。

B「大きくて、いばいばなのが良からう。」

A「よっ！」

B「オヤ、ご機嫌麗しゅう。」

A「畑にいるなんて、珍しいな。」

B「河童が遊びに来たから、キュウリをやるうと思ひ、もぎに来たのだ。」

A「さようか。俺も河童に会いたいな。」

二人で河童の元へ戻る。

河童「おかえり〜。あ、こんにちは。」

A「こんにちは。」

B「ほら、キュウリ。」

河童「わあっ！美味しそう〜。ありがとう。」

夢中でキュウリを食べる河童。

B「美味しいか。」

河童「うん！」

あっという間にキュウリを食べ終わる河童。

A「ところで、どうして河童なのに、頭の上にお椀が乗っているのだ。普通、皿ではないか。」

河童「お皿だと、すぐ乾いちやうでしょ。だから、本当のお父さんにもらったお椀を載せているんだあ。」

B「お椀を外すと、頭はどうなってるんだね。」

河童「えっとね、はげてるの。まあるく。」

場が、微妙な空気になる。

B「・・・悪かった。」

河童「全然気にしてないよ。ほら、河童はげつて言うじゃないか。河童は、はげてるものなんだよ。」

A「頭のお椀は、漆塗りのようだが、痒くならないのか。」

河童「僕の体はぬめぬめしてるから、平気なの。」

B「良いお椀じゃないか。」

河童「でしょ。でもね、新しい父さんは、『そんなお椀、みすぼらしいからやめなさい。』ってうるさいんだよ。だから家出てきちゃった。」

A「帰らなくていいのか。」

河童「平気平気。母ちゃんも、新しい父ちゃんも、自分のことしか考えてないから、僕がいなくなつて気にしないサ。」

場に、微妙な空気が流れる。

B「家出して、夢中で泳いでいたら、吾輩の家の井戸に着いたのか。」

「
河童「びんご！」

A「本当に帰らないのか？」

河童「出来れば、ここに置いてほしいの。……だめ？」

B「構わないが、お前はそれでいいのかね。」

河童「うん。友達の家にお泊まり会に来た気分。こんなに楽しい気持ち初めて。だからいいの。帰っても嫌なことばかりだし。」

Bに耳打ちするA。

A「俺たちは大変な奴を拾ってしまったな。」

AとBは二人で裏山へ来た。

A「お前は、河童に優しいな。」

B「そう見えるか。」

A「ああ。」

B「それがどうしたというんだね。」

A「どうしてそんなに優しいのだ。」

B「怒っているのか？怖いぞ。」

A「怒つてないさ！
しばし沈黙。」

B「吾輩は、弟が欲しかったのだよ。一人っ子だからか、どうも寂しくてな。だから、幼い河童を見ていると、ついつい優しくなってしまうのかもしれない。」

A「ふーん。」

B「吾輩が河童に優しいと、お前に不都合でもあるのか。」

A「良く考えてみ給え。俺たちは、ようやく最近、けんかしなくなつて、友人同士らしくなつた。それなのに、この前現れたばかりの河童が、瞬間にお前と親しくなっているじゃないか。俺の今まで
の努力が負けた気がしてな。だから、どうも気が晴れぬ。」

B「何を言っているんだ。負けてなどいない。今まで過ごしてきた

日々は、何者にも勝る。なあ、そうであろう。」

A「そうだな。俺はどうかしていた。悪かったな。」

B「いや、気にするな。吾輩も、最近お前が不機嫌であるのが、少々気になっていて、話そうと思っていた所なのだ。」

A「お前、心配してくれていたのか。」

B「当たり前であろう。友人だからな。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9724n/>

少年戯曲

2010年10月9日15時29分発行